

北星学園大学文学部北星論集第50巻（通巻第57号）（2013年3月）・抜刷

# 『西鶴諸国はなし』「大晦日は合はぬ算用」の 構想と方法

宮 澤 照 恵

## 『西鶴諸国はなし』『大晦日は合はぬ算用』の構想と方法

宮澤 照恵

## 目次

- I. はじめに
- II. 咄の組み立てと素材
  - 1. 人物造型と主題
  - 2. 全体を貫く構造論理——「算用が合う、合わない」
  - 3. モチーフと、その素材
- III. 盗賊配分説話の利用
  - 1. 『盗賊配分金銀之辯』
  - 2. 説話との接点
  - 3. 取り合わせの工夫
- IV. 咄の整合性とウソ咄の構築
- V. おわりに

## I はじめに

『西鶴諸国はなし』巻一「大晦日は合はぬ算用」は、西鶴の浮世草子作品の中でも取り上げられることが多い作品の一つで、その時々の時代相を反映しながら様々なアプローチがなされてきた。今試みに、章末に置かれた評言「武士のつきあい格別ぞかし」と目録小見出しの「義理」の解釈に焦点を当てて私に整理してみると、おおよそ次のよ

うになるうか。

まずは、評言を文字通り肯定的に受け止める立場がある。直前の「あるじ即座の分別、座なれたる客のしこなし、」から続く「かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし。」という一文は、文字通りに読めば「あるじには当意即妙の思慮分別があり、浪人仲間の客たちは座なれた振舞いをする。あれこれ考え合わせると武士のつきあいとは特別なものだ」ということになる。この読みを前提とした上で更に発展させて、「武士のつきあい格別ぞかし」に、義理を重んじ互いを信頼する武士の態度への賞賛を読み取る解釈<sup>1)</sup>や、人に知られることなく一両を元の持主に持ち帰らせた主人公内助の理知的振舞いに注目する解釈<sup>2)</sup>、作品に描きこまれた浪人達の心情の動きに『世の人心』への先駆けを見る解釈<sup>3)</sup>、浪人の窮状への共感から清貧を重んじる武士の姿を形象化しようとしたとする論<sup>4)</sup>などが展開されて、影響力を持った。その多くは、目録に提示されている小見出しの「義理」を守るべきモラルの一つと捉えており、「義理」は本話のキーワードであると共に、話をそこに収斂させる主題であると考える傾向が見られる。

キーワード…西鶴諸国はなし 大晦日は合はぬ算用 盗人説話 咄全体を貫く論理 算用が合う、合わない

これに対し、昭和三〇年代に森山重雄氏が、「共同体の人間関係に内在する矛盾への気付きと内在的な批判（が見られる）」と発言した<sup>5</sup>例のように、本話に批判的なニュアンスを読み取る系譜がある。昭和五〇年代終盤以降には、「武士のつきあい格別ぞかし」に對して、より積極的な笑いや皮肉・諷刺、或いは奇談性の強調などを読み取る解釈が多く見受けられるようになる。章末に置かれた評言には西鶴のひねりが加えられている、という読みである。かいつまんで言えば、次のようになるのか。「一文だけを取り出せば、武士のつきあいに對する肯定的文言に見える。しかし、全体のコンテクストに従えば、この咄の書きぶりが賞賛とは相容れないことは自明である。あるじには『即座』の分別などなかったし、客たちの言動は決して座馴れてなどない。そもそも小判を回し見ること自体が無分別である。評文と本文とのこうした齟齬を出発点とするならば、評言には西鶴の作意を読み取るべきである。」というのである。

本文に即した読みを迫るこの立場からは、前述した森山氏の「人間関係に内在する共同体の矛盾によって引き起こされる社会的身ぶりを人間喜劇としてえがいた」とする解釈を始めとして、展開の意外性や滑稽感を重視して俳文の性格を看取する解釈<sup>7</sup>、武士の義理をめぐるリゴリズムに注目し、そこに不調和の笑いを読むもの<sup>8</sup>、人物設定・描写・展開にわたり一貫して滑稽な奇談の性格が色濃いとする解釈<sup>9</sup>、町人からみた武士批判説などが展開された。ここに連なる諸論考では、目録小見出しが主題か否かはさほど問題とされていない<sup>10</sup>。小見出しの「義理」の意味内容自体が、反転させることによって笑いや奇談に転化し得るフレキシブルなものである、といった了解が共通して存するよう思われる。

ところで、近時同じ方向の延長線上に、杉本好伸氏が「紛失した一

## (11)

両は主人公内助自身が蓋の上にうっかり置いたものではないか、」という読みの根底を見直す見解を提示された<sup>11</sup>。氏の読みに従えば、一話は武士への賞賛どころか愚か村譚にも通じるナンセンスな趣を帯びることにさえなろう。

以上、評言と目録小見出しとを取り上げ、解釈をめぐる二つの相反する立場があることを概括した。そもそも、こうした解釈の相違が生じる理由は、西鶴の表現そのものが両様に読み取れる可能性を含んでいることにある。本話の評言に見られるような、それまでの文脈からみると飛躍のある断定的な言辞、或いはあつてしかるべき説明の省略などは、咄に奥行きを与える効果を持つ。そのことが同時に、読者の想像力をかき立て、複数の読み筋を許容することに繋がることは自明であろう。要するに、評言の解釈論争は、咄が本来持っている飛躍や省略に絡む側面を併せ持つ問題だということである。一方、文末に置かれた評言は、咄の枠組みとしての装置という機能的側面も担っている。どちらの解釈に与するかを問題にし続けるだけでは、これから先の新たな読みの進展はさほど期待できないだろう。既に評言の意義や機能そのものを再考すべき段階に來ていると考える。

本稿では、一旦評言の解釈論争から距離を置き、西鶴の創作方法に寄り添うことによって、新たな読みの可能性を探っていきたいと思う。<sup>12</sup>誤解を恐れずに言えば、咄を創る側の視点に立つて西鶴の手の内を楽しみ、時に自ら進んで謎解きに挑む「読者参加型の読み」を試みようというのである。創作に際して、西鶴は執筆契機となった咄の種類を何処から発見したのか。その種を素にしてどのような構想の核を育てたのか。或いは、モチーフに目を向けてみる。本話は一話完結型の緊密な咄になってはいるが、複数のモチーフから成り立っており、一

一つのモチーフ(エピソード)には素材がある。その素材をどのようにに組み合わせ、どのようなアレンジを加えて時間系列に沿った一つのストーリーに流し込んでいるのか。そこにどのような作意や仕掛けが施されているのか。西鶴の手法や組み合わせの妙を楽しむ。推理する。共有する。——作者との間の共通コードさえ発見できれば、こうしたより根源的な創作過程を読み解くことも可能になる。いわば、連句の付筋を解し、付合の世界を享受する道筋に一脉通ずるところのある読みを試みようというのである。

以上の目的意識を念頭に置き、次節では、咄全体を貫く新たな論理に目を向け、一話の構造を捉え直すところから始めていきたいと思う。その際、西鶴が利用したであろう素材や話型に十分な目配りをしていくことが、重要な手掛かりとなる筈である。

## Ⅱ 咄の組み立てと素材

### 1. 人物造型と主題

先に触れたように、本話に笑いの要素が見られることは、一部で指摘されてきた。とは言え、軽口咄の類という捉え方をされることは皆無であった。「個性的な人格を持った一人の浪人とその仲間たちが遭遇した出来事を、心情に踏み込む描写を伴って描き出したストーリーの整ったテーマ性のある話である」という前提のもとに読まれてきた、と言って差し支えないと思われる。この認識を自明のこととして捉えてよいのだろうか。

明確な主題のもとに咄が展開され、登場人物それぞれが自立した上で物語を増幅させる力を備えている、更には時間系列に従って展開するストーリーに破綻はない、というのであれば、ここで改めて「咄全体

を貫く新たな論理」を求め、作品の構造を捉え直す必要は無いことになる。回り道のようなではあるが、ここでは、何らかの主題なり登場人物なりが咄全体を貫くものとして用意されているのかどうか、備わるのであれば、それらが咄の中で十全に機能しているのかどうかを検証することから始めたいと思う。その際、事件の形象化(ストーリー展開)が矛盾なく組み立てられているのかも併せて確認していきたい。

### 〈内助の造型〉

冒頭、主人公内助の登場場面は次のように説明される。<sup>13</sup>

框・かち栗・神の松・やま草の売声もせはしく、餅突く宿の隣に、  
煤をも払はず、二十八日まで髭もそらず、朱鞘の反をかへして、「春  
まで待てといふに、是非にまたぬか」と、米屋の若い者を、にらみ  
つけて、すぐなる今の世を、横にわたる男あり。(傍線筆者)

朱鞘の腰の物を差し、借金取りに來た米屋の若者を相手に「切り殺すぞ」という態で刀の反りを返す。何とも傍若無人な振舞いである。年の瀬というのに、正月準備など何一つしない。髭も剃らない——詳細は省くが、これらは個性的な人物造型というよりは、むしろ近世初期に見られた旗本奴や町奴の風俗をそのまま写したもので、類型的な描写の域を出ていない感がある。西鶴の描く浪人像を一瞥すると、本話のように、町人に対して横車を押し無理な世渡りをする例は少なくない(『世間胸算用』巻一「長刀はむかしの鞘」、『西鶴織留』巻五「具足甲も質種」など)。

内助の人物造型の中で一際目を引く「朱鞘」の例を挙げておこう。『好色一代男』巻一「尋ねてきく程ちぎり」で、世之介が撞木町の遊女の

父を山科に尋ねる条には、

「なはたづねゆかん」と里に行きてみれば、柴のあみ戸に朝顔いとやさしく作りなし、鍔一すぢ、鞍のほこりをはらひ、朱鞘の一致しをはなさず。

とある。<sup>16</sup> 朱鞘の刀を差す武士は、『男色大鑑』巻二「雪中の時鳥」にも見える。いずれも浪人で、この刀を武士の命とばかりに後生大事にしている設定である。朱鞘の刀は、輝いていた時代の象徴でもある。博物館などで現物を目にするところがあるが、梨子地蒔絵に較べると大分薄手な印象である。年代物となれば、時代遅れの感がまわりつく。要するに、「朱鞘」の刀は、際立った個性に通ずる刀のつくりではなく、カブキ者の風俗をかすめたいささか時代遅れの、典型的な浪人の造型の一つと言えよう。なお、その朱鞘の「反りを返す」とは、刀を抜く構えになること、相手を殺す意志を意味するわけで、ここには内助の特異性が見える。仲間に見せる顔とのギャップの大きさを示すには甚だ効果的な言動である。しかしこれも、諸例を見ると無頼者の日常の一齣として読むことが可能な範囲と考えられる。

以上、主人公内助の人物造型については、存在感はあるものの類型的表現の枠内にある、と捉えるのが妥当であろう。物語を牽引し増幅させる役割を担うべく、確とした人格を与えられた人物であるとは言いがたい。類型的浪人像を登場させることによってこそ、本話の軽さが保証される側面があることを見落としてはなるまい。

#### 〈主題〉

次に、主題について取り上げたい。本話に何らかの主題と言えるも

のが用意されていたと仮定するならば、目録小見出しに明示された「義理」を無視するわけにはいくまい。検討しておこう。

前半に描かれる町人に対する横柄な態度、及び義兄から届いた思いがけない十両包み、という二つのエピソードは、「義理」に帰属する話材とは言い難い（「義理」を主題として咄が設計されたのであれば、前半部分は単なる導入に過ぎないことになる）。続く山場には、貧しい暮らしの中でも、仲間うちに限っては礼儀や誠実さを重んじる浪人群像が描き出される。彼らのやりとりには、傲慢さや私利私欲の色が皆無である。「義理」に基づく浪人仲間の言動は、それぞれが正義感に満ちているが、冷静に観察すれば、その内実は自己満足であったり、仲間の迷惑を考慮するゆとりのないものであったりする。互いを思いやる登場人物たちの言動は空回りし、新たな難題を生み出して事態の混迷を招いていく。事態の終結を導いて価値ありげな印象を残すのは、最後になって絞り出された内助の「機知或いは智恵」の方である。「義理」は、咄の着地点には置かれていない。

以上、本文に即してみれば、目録に提示された「義理」は、大幅に笑いや皮肉の方向に転換された意味合いを持つものであり、同時に話材の一部（仲間同士のやりとりの部分）にのみ関わるものであると言う他はない。エピソードの連なりからなる咄の構造上から見ると限りは、「義理」は、全体を貫く論理或いは全体をそこに収斂させていく主題としては機能していないことが明らかである。

それでは、「義理」以外の語彙が主題に成り得るだろうか。「義理」を組上に載せた際、咄の流れを説明する上で「礼儀・誠実さ・正義感・機知・智恵・笑い・皮肉」などといった語彙を用いた。これらの語彙の何れかを主題と考えることができるかと言えば、一つ一つについての検討は省略に従うが、やはり無理がある。一つのエピソードが閉じ



ると、新たに別なエピソードが登場し拡散していこうとする構造の中では、咄自身が動きを持ち、一つの語に収斂していくことを拒んでいくからである。今日的な意味での作品の主題を抽出する試み自体が、甚だ困難な作品なのである。

以上、個性的な登場人物や明確な主題が存するといった近代的な捉え方が、読みの前提として一部に見られることに疑問を呈した。それでは一話を貫く縦糸は皆無かと言え、縦糸の用意は備わっている。一つは、終始浪人を登場させていることである。但し、物語の増幅を担うことができるような個性を持った独自性の強い人物造型とは言えないことは、先に見たとおりである(繰り返し返せば、存在感はある、しかし、類型的な描写の範囲から抜け出していないのである)。一つは、規定された場所と時間の枠組である。一年の総決算期である歳末と、品川の宿場。この二つの定点が、本話の緊張と密度とを保つ重要な要素となっている。以上の他に、この咄の重要な縦糸になっているものが、冒頭で触れた「咄全体を貫いている論理」である。次項において、この点を詳しく述べていきたい。

## 2. 全体を貫く構造論理——「算用が合う、合わない」

「一話を貫いている論理」とは、何か。結論を先に言えば、章題に含まれている「あはぬ算用」こそが、この縦糸、すなわちいくつかの題材(エピソード)を繋ぐ一話の構造論理になっていると考える。

次頁に掲げる表は、内助の側から展開を追った場合の咄の流れと、金の動きに焦点を当てた場合の展開とを対比させたものである。一つ一つの情景に応じて、金の動きが配されていることが明白である。以下、「金」の動きの方に焦点を当て、「算用が合う、合わない」に注目

して咄の展開を詳しく追ってみよう。便宜上、咄の流れに沿って1)7の番号を付して説明を加える。

- 1 生活の「算用が合わない」浪人が、掛取りに対して横車を押す歳末風景——掛取りの側も内助の側も共に歳末の「算用が合わない」(不足)ことで、咄の幕が開く。
- 2 内助は、歳末に届いた義兄からの合力金十両によって、思いがけず「算用が合う」。
- 3 金包みの上書きに凝らされた趣向を披露する名目で、仲間を招待する。年越しの「算用があつた」幸運を皆で言祝ぎ、酒が重なる。包みが破れる。
- 4・1 宴を閉じようと鍋・蓋を片付け、裸金になって散らばった小判をしまおうとして、一両の不足に気づく「算用が合わない」(不足)。
- 4・2 一両の不足をめぐって、内助は辻褄を合わせようと言い繕いをする「算用を合わせようとする」(言葉)。だが、客の方は帯を解き搜索と身晴れに向かう「算用を合わせようとする」(動き)。
- 4・3 三人目の客が、疑いを招く怖れのある一両を所持「算用が合う」(見掛け上)。自害しようとする。
- 5 別な客が「小判はここにあつた」と一両を投げ出す。この機転によって窮地が救われ「算用が合う」。
- 6・1 台所から内助の妻が重箱の蓋に付着した一両を持ってくる「算用が合わない」(余剰)。
- 6・2 増えた金を言祝ぐ「算用が合わない」(余剰)。
- 6・3 内助の呼びかけと膠着化「算用が合わない」(余剰)。
- 7 内助の工夫。余剰金が消え(持主に戻り)「算用が合う」。

	内助の側から見た展開	金に焦点を当てた場合の展開	算用	素材
1	師走、借金取りへの横車	歳末の掛取り金	×	ア
2	義兄からの合力	貧病の妙薬の金十両	○	イ
3	浪人仲間を招待、宴席	披露された金包みの趣向、包みが破れ、裸金の回覧へ	○	① ↓
4. 1	第一の事件発生（不足）	紛失した一両	×	② ↓
4. 2	内助…初めから九両だったと言う	紛失した金を巡り、算用を合わせようとする主と見晴れを証明しようとする客	○ ↓	③ ↓
4. 3	客…帯を解く		×	④ ↓
4. 4	(→失敗) 客の一人が切腹しようとする	疑いを招く一両…小柄の代金所持	△ ↓	
5	仲間を死から救う客の機転	窮地を救う一両	○	
6. 1	(→失敗) 第二の事件発生（余剰）	重箱の蓋に付着した一両	×	⑤ ↓
6. 2	客の言祝ぎ	増えた金	×	⑥ ↓
6. 3	内助の呼びかけ（→膠着化）。夜がふける	持ち主不明の一両…場の動きを止める	×	⑦ ↓
7	内助の提案と工夫（→解決）	客の手（本来の持ち主か）に戻る金	○	ウ

「算用」の欄の記号は、外見上の算用が「合う○、合わない×、どちらともいえない△」を示し、矢印は連動性を表す。「素材」の欄の「ア・イ・ウ」は話型・原拠があるもの、①～④及び⑤～⑦は、論者が本話のオリジナルな趣向と考えるもので、それぞれの内容については次項及び次節で扱う。

## (六)

以上列挙したように本話は、金額の多寡、不足と余剰、シチュエーションの変化、言葉と行動など多様な要素を織り込みながらも、実は「算用が合う、合わない」というエピソードの連なりから成り立っている。この点に注目して全体を見直すと、「大晦日は合はぬ算用」という咄の構造が明確になる。「合わぬ算用」、「合う算用」、「合わぬ算用」……と続けてきて、最後に「合わぬ算用」が「合う」ことで一話の結着がつき、話が終わるのである。武士の義理咄と読めるが、視点を変えれば、「算用が合う、合わないの話」の積み重ねでもある。そこに「武士の義理咄」を取り合わせているという見方が可能となろう。

### 3. モチーフと、その素材

本話で利用されている話のモチーフの中には、話型や趣向がパターン化し定着しているものが含まれる。はじめに、上の表で示した素材欄の「ア・イ・ウ」について触れておきたい。

ア 町人に対して横車を押す六方者の風俗を取り込んだ浪人像の類型（上述Ⅱ・1〈内助の造型〉）

イ 葉袋の効能書をもじった趣向。『可笑記』巻二、大江文平の話が素材。同想の話は、『一休諸国物語』巻二ノ六、『秋の夜の友』巻三にもある。<sup>18</sup>

ウ 一人ずつ立たせて帰らせる機転。西鶴の後の作品『本朝桜陰比事』巻一「太鼓の中はしらぬが因果」に、被疑者に知られぬようにして個別に真実を探る奉行の機転を適用した好例がある。<sup>19</sup>なお、公事訴訟の類で被疑者一人一人を秘密裡にかつ個別に吟味する例は、和漢共に先例を特定し得るような特別なものではないと考える。犯人捜しという方向ではなく、善意の持主（小判を投げ出し

た人物)にその金を返すための工夫として個別に帰らせる策を考え出したところが、本話の工夫である。一方、『智恵物語』・『堪忍記』に取られる楚の莊王の話——女の袖を引いた狼藉者を、臣下全員の冠の緒を切らせることで庇った処置——に、本話との共通性を見出すことができるという指摘がある。特定の一人の行為を一座の各人の直視から遮蔽した、という点で本話との共通性を見ようとする説であるが、素材源と断定するには意図や行為などに若干の疑問が残る。

以上、先行する話型及び趣向を指摘した。作者の素材袋の豊かさや取り合わせの確かさを楽しむという読み方からすれば、周知の話型や趣向をうまく当て嵌めた部分を通して、素材探しや謎解きのおもしろさが増す効果が生まれることは明らかである。

### Ⅲ 盗賊配分説話の利用

これまで、「算用が合う、合わない」が、本話を貫く論理であることを指摘し、先行する話型及び趣向にも触れた。しかし、それだけでは、本話の山場となる部分の説明がつかない。すなわち、仲間うちで金包みの趣向を楽しむうちに包みがほどこけて裸金を回覧することになる展開や、その小判が一枚紛失すること、更には自らの身の潔白は勿論のこと、仲間の中には盗むような人間はいないはずだ、という浪人達の確信、その確信に基づいて次々に仲間の間のやりとりが進行し新たな難題を生み出す、といった本話の中心話題となる諸要素(表の①～④)が説明できない。この点を補う材料として、新資料『盗賊配分金銀之辯』<sup>21</sup>の中の、西鶴が利用した可能性のある部分を含む盗賊配分

説話を提示してみたい。なお、同資料については既に翻刻紹介をしているので、参照されたい。

#### 1. 『盗賊配分金銀之辯』

本話と直接繋がりを持つと考えられる部分を以下に示す(一)は原本朱による加筆、(二)及び(三)は論者による補足。

アル所ニ、童<sup>〔ナカ〕</sup>共寄<sup>〔リ〕</sup>合<sup>〔ヒ〕</sup>、物<sup>〔ナカ〕</sup>語シ居ケル中ニ、一一人語ケルハ、「盗<sup>〔ナカ〕</sup>人金ヲ盗<sup>〔リ〕</sup>取テ、同<sup>〔ナカ〕</sup>類寄<sup>〔リ〕</sup>集<sup>〔リ〕</sup>、頭<sup>〔トウ〕</sup>取ノ大<sup>〔ナカ〕</sup>將<sup>〔ナカ〕</sup>、下<sup>〔ナカ〕</sup>知シテ、配<sup>〔ナカ〕</sup>分ニ及フ時、小<sup>〔ナカ〕</sup>判小<sup>〔ナカ〕</sup>粒ノ中ニ、二<sup>〔ナカ〕</sup>朱<sup>〔ナカ〕</sup>判<sup>〔ナカ〕</sup>一ツ交<sup>〔ナカ〕</sup>リアリ。各等<sup>〔ナカ〕</sup>分ニ、分ケ与ヘテ後ニ、『カノ二<sup>〔ナカ〕</sup>朱<sup>〔ナカ〕</sup>(一オ)判ハ』ト問ヘバ、『コ、ニモ無<sup>〔ナカ〕</sup>シ、カシコニモ見ヘズ』ト云テ、兎<sup>〔ナカ〕</sup>角出ズ。『今迄爰ニ有シ』ト、尋レドモナシ。其<sup>〔ナカ〕</sup>時、頭<sup>〔ナカ〕</sup>取アキレテ、『サテモ不<sup>〔ナカ〕</sup>審也。此<sup>〔ナカ〕</sup>中ニ、手ノ早キ者ハ、ナキガ』ト云テ、笑テ、分<sup>〔ナカ〕</sup>散セシ』ト語テ、笑ヒドヨメキヌ。

盗人仲間が寄り集まって金品の分配をする。等分に分配が終わったところで、今までそこにあった二朱金が紛失していることが判明した。手下に尋ね、探し出したが出てこない。首領はすべて見通した上で、「仲間内に盗人はいないはずだが。」と言つてそれ以上は追及しなかった、という笑い咄である。当該本では、頭目の言葉を文字通りに解することと盗賊集団の視野狭窄を断じ、「自分たちの有り様を客観視できない」当世学者批判・半可通批判に繋げている。一方、盗賊達の戦利品



分配中に紛失した「二朱判」は元禄十年六月に始めて鑄造されたもので、この時のものは宝永七年四月まで通用していたとされる。従って、盗賊金銀配分説話は、元禄十年以降十数年の間の話ということになる。『盗賊配分金銀之辯』自体は『西鶴諸国はなし』の三十年後の資料であるが、同種の笑話が既に『醒睡笑』（広本系写本）にみえる。次に引用しておく。<sup>23</sup>

盗人、物をとりすまして、人なき所にあつまり、それ／＼に資財をわけどりにしけるが、唯今までありつる身のぐひか見えぬ。いな事やといふ。一人つらをふり／＼、あらふしんや、誰もこのうちに、ぬすみさうなる者はないにと。（『醒睡笑』巻四「そでない合点」第一七話 寛永五年）

この咄がさらに江戸後期まで命脈を保っていることは、「盗人の寄合」（『民和新纂』安永十年）に、「これほどの心底を明かし合ふた中に、盗人があらふとは思はぬ」の例があることなどから知ることができる。以上、盗賊の仲間うちで分捕り品を分配している最中に何かが紛失し（実は分捕り品の一部を誰かが盗んだことはわかっているという状況の中で）、自分たちが盗賊なのに仲間を信頼して、「この中に盗人はいないはずだ」という、この種の笑話は近世初期から知られる。西鶴も周知であった可能性が高い。

## 2. 説話との接点

「大晦日は合はぬ算用」の浪人と「盗賊配分説話」の盗賊とは、フィクション化の際の人物造型の仕方が奇妙に類似している。以下では、両者の共通点及び接点に触れておこうと思う。なお、論述の都合上、

(八)

前掲表の素材欄に掲げた①～⑦の数字及び記号を併記しておく。

・まず集団の特性であるが、何れも仲間内の信頼や結束が固い集団として描かれていることが挙げられる（浪人に置き換えると「義理堅さ」が加わる）。社会的に見れば、各構成員が他に帰属する場を持たない特殊な集団であることも共通する。

・どちらの咄においても、仲間が車座になって裸金を回しあう、という非常に特異な状況が生まれる（①）。「大晦日」では酔余の出来ごとと推定されるものの、世間一般ではありえない状況である。その中で共に金銭が紛失する（②）。

・紛失した金をめぐって、両者ともにどこかに紛れていないかを探す場面が挿入される（「大晦日」では、浪人達は着物を脱いで探す④）。

・その後、「盗賊説話」では、座を差配している者が、「仲間内に盗人はいないはずだ」として、その場を収める。「仲間内に盗人はいない」という論理は両者に共通するが、「大晦日」では、座を収めようとする言動（③）が新たな難題に繋がってしまう（「大晦日」では、そこから更に展開し、「不明な余剰金」のモチーフ（⑤・⑥・⑦）や「犯人捜し」の場などに用いられる機知」のモチーフ（ウ）などを取り込んで広がりをもせる）。

・犯人を追及しない頭領と、「はじめから金子は九両で、自分の勘違いであった」と仲間をかばう或いは穏便にすませようとする内助の言動（③）に、共通するものがある。

・単なる行為の描写を越えて、狭い範囲でしか通用しない仲間内のみの相互理解や共通言語、心情が見える（なお、盗賊咄と人情はなしとの融合は、前例が見られる。<sup>26</sup>『西鶴諸国はなし』巻三「蚤の籠抜け」に登場する盗人にも、心の動きが垣間見られるところである）。

以上、二つの咄の接点を列挙した。「大晦日は合はぬ算用」前掲表④の部分を、本文に即して補足しておこう。

客の一人が身の潔白を証明しようとして始める④の行為であるが、これは仲間の誰かを不利な立場に追い込むことになる可能性が高い提案である。だがこの時点では、たまたま金を持っている仲間がいるかもしれない、とか、犯人を追い詰めることになるかもしれない、などと考える余裕はない。浅い考えだが、「我々の中に盗人はいないはずだ」、「自分は潔白だ、他の仲間だつてそうに違いない」という確信から出た発言である。笑話「盗賊配分はなし」の設定自体をずらして浪人仲間に置き換えると、「外では横車を押しても仲間内では義理堅い、仲間内に泥棒はいない筈」と、一途になる。だからこそ、次に想定外の事が起きたときに、結束の固いメンバーは、全員が難題に立ち向かわねばならなくなる。仲間内に盗人はいないという論理は、我々浪人仲間裏切り者はいない、窮地に陥った仲間がいれば我が身の損得を省みずにかばい立てをする、という武士の行動へと飛躍していく（なお、前述した「算用が合う、合わない」という構成論理から見ると、この飛躍こそが次のターニングポイントを作り出すための装置となる）。

ところで、『盗賊配分金銀辯』では、この咄が「童」共寄「合」<sup>『ナカ』</sup>「物」語シ居ケル中二、——人語ケルハ」として紹介されていた。子供達の話題という設定が不自然にならないほど広く知られていた咄ということになる。とすれば、西鶴が「盗賊説話」を「浪人仲間」になぞらえた作意は、十分に解き得る謎掛けの範囲であったと思われる。盗人集団の笑い咄を浪人集団に置き換え、町人に対する態度との落差

や金を前にして右往左往する武士群像のちぐはぐなおかしみに取りなし、更には前後に（イ）・（ウ）などのモチーフを加えて新たな咄を創作したのである。

但し、盗賊説話と武士（或いは浪人）との距離は、かけ離れたものではない。参考例として、盗賊説話をもとに侍の心得に至る周知の『浮世物語』巻三「ぬす人の事」を示しておこう。

唐士の三人の盗賊が、宝物の分配に際し互いに一人占めをねらって、一人を谷底へ突き落とす。残る二人の飯の中には毒が盛られており、結局三人とも死に至る。この盗賊分配説話の最後は、次のように締め括られている。

そのごとく、（武士も）軽薄、表裏をいたす事、主君の氣に入りて物をもらひ、知行の加増をも給はらんと、たがひにへつらひ嘘をつく故に、天罰あたりて、両方ながら身上を滅却する、かのぬす人のたぐひなり。されば荀子がいはく、『士に妬む友ある時は賢なる友したします、君に妬む臣ある時は賢人いたらず』といへり。まことの侍は、人のよきをねたまず、人の悪しきをば隠してひろめず、おのれ他人の善悪を鏡として身をつつしみ、言葉をつつしみて礼あつく、心だて正直なり<sup>26</sup>。

この例の他、両者の言葉の上での連想が案外に近いものであることは、『類船集』の付合「浪人——盗人」からも窺い知ることができる。西鶴が盗賊説話をもとにして浪人咄に置き換え、咄を創作したとしても、あながち突飛な発想ではなさそうである。

## 3. 取り合わせの工夫

これまでに、咄全体を貫く論理があることを指摘し、各部分を構成しているモチーフとその素材源とを分析してきた。金を巡る歳末の浪人群像の咄に「盗賊説話」を取り込む着想が一篇の核となっていることも確認した。ここでは、西鶴がそれぞれのモチーフを活かし、組み合わせた際の工夫に触れておきたい。

論理の柱は「合はぬ算用」である。ここで想定される題材は、まずは大晦日の収支決算であり、掛取りとのやりとりであろう。又、個々の日常レベルでは、損益勘定が日々ついて回る。金の紛失といった突発事故も、「合はぬ算用」の想定範囲である。反対に不明な余剰金が生じることも起こり得る。フィクションで取り上げられたり表面化したりすることはほとんどないのであるが、商人の日常業務の中ではありがちな事態である。そこを「合はぬ算用」の一齣として、一話の中に自然に取り込んで見せたことが、本話の新しさの一つと考える。

そもそも、金包みの趣向「貧病の葉」という第一モチーフの契機を抜きにしては、続く「裸金の回覧」という盗賊説話を基にした非現実的な設定が説得力を持たない。従って、続く「小判の紛失」・「不明な余剰金」という主要モチーフも積み重ねることができないことになる。以上並べてみれば、「算用が合う、合わない」という連結論理のもとで挿話が緊密に繋がり、次のモチーフを呼び込んでいる構造が見えてこよう。次に構成の諸要素を示しておく。

## ① 合はぬ算用

- ・ 大晦日の収支決算
- ・ 金の紛失
- ・ (損益勘定)

※ 不明な余剰金の発生

## ② 「仲間うちの義理」が生きる集団

- ・ 信頼や結束が固い
- ・ 人間関係が長期にわたって存続している
- ・ 狭い擬似共同体
- ・ 信条・目的などを共有する

右の①と②とを組み合わせ、一つの世界を構築している(※は西鶴のオリジナルな着想)。

## Ⅳ 咄の整合性とウソ咄の構築

先に取り上げたように、文末の表現「あるじ即座の分別、座なれたる客のしこなし」や目録小見出し「義理」と、叙述の内容とは必ずしもかみ合っているとは言えない。こうした枠組み上の不整合の他にも、展開上理屈に合わない、しかし読者は話に巻き込まれて不合理性に気づかない、といった設定はいくつか指摘できる。

例えば、近年杉本氏が指摘されたように、「重箱の蓋に小判が張り付く」という設定が不合理である。本文に即してみると「山芋の煮しめを饗したが、その湯気で小判が蓋に張り付いたのだらう」ということになっている。山芋は、生で搾り下せば粘りが生じるが、煮しめになれば粘着性はなくなる。だが事態の急転に巻き込まれた読者は、山芋からイメージして、いかにも小判が張り付いてしまう可能性もあるのではないかと、咄に乗せられてしまうわけである。ここは論理的に

考えれば、杉本氏の指摘にあるように、暗がりの中、酔っぱらった客達が裸金を回し見るうちに、一枚が料理の重箱の蓋の上に置かれた、と考えるのが場の状況としては妥当であろう。だが、その理屈よりも「一両の金が偶然に不可抗力で室外に持ち出された。誰の落度と特定はできない。そして、後にそれが不自然さを伴うことなく発見された」という設定が確保でき、読者が理屈や事実には気づかないこと(理屈に気づくことによって読みが固定される方向を避けること)をねらったのではないだろうか。

咄の流れに説得性を持たせるのに、重箱の蓋に載る小判を描いた挿絵も一役買っている。「江戸に住みかね、品川の藤茶屋のあたりに棚かりて、朝の薪にことをかき、夕の油火も見ず。」といった極貧の生活を送っている内助。更に「くづれ次第の、柴の戸」といった描写などからすると、当該の挿絵はいかにも不釣り合いに感じられる。だが、逆に絵の舞台が長屋だとすれば、裸金を扱うこと自体がより不自然になる上に、武士の矜持が保てない怖れが生じる。また、別室で重箱の小判を発見する必要性があること、挿絵の分量が本書の構成上見開きを要求していること、下髪の女が長廊下を歩く或いは何かを運ぶ図は前例があり取り入れやすいことなども、この挿絵の構図に関係しているであろう。だがそれ以上に、挿絵はウソ咄の部分に気づかせないための目眩ましの一つになっていると言えるのである。

次に「年忘れの会」の設定について、その整合性を考えてみたいと思う。結論を言えば、年忘れの会そのものを大晦日の夜の話とするには無理がある。これまで諸論考においては、内助とその仲間の年忘れの会を章題の通りに大晦日の夜と捉え、論じられてきている。しかし、もし年忘れの会が大晦日であったとすれば、客達は夜更け鶏が鳴いて

から、すなわち新年を迎えてから家に帰ったことになってしまう。それぞれが抱え込んだ「合わぬ算用」が年を越すこと自体が不自然である。年内に解決しなければ自己矛盾が生じる。又、貧しい暮らしをしている仲間の浪人の中には、一両小判を持ち合わせた者が少なくとも二名いたわけだが、それらは年末の支払い用に工面されたものである筈だ。一切を棚上げして新年を迎えるまで仲間の家にいるという設定は、たとえ予想外の膠着状態が生じたとしても、おかしい話である。「それすらも世間と隔絶した浪人らしさである」と言って言えないこともないが、やはり強引な解釈だろう。理屈どおりでなくとも良いと言ってしまうばそれまでだが、ここは大晦日の前日か前々日を想定しておくのが妥当であろう。

本文には、内助は「二十八日まで髭も剃らず」とある。しかし、大晦日の三十日に人々が集まった、という記述はどこにもない。テキストに従えば、二十八日に話がスタートし、その日、あるいは二十九日に人々が集まった(小の月であれば二十八日)とするのが整合性がある読みということになる。しかし、章題が「大晦日は合はぬ算用」となっていることや、最も切実な決算日が「大晦日である」という事情から、読み手は、中心話題となる浪人仲間の集まりが大晦日当日と錯覚してしまう。西鶴の咄に乗せられ、実際に大晦日に人々が集まったと感じ取ってしまうわけである。ここは、「大晦日は算用が合わず、毎年のことながらみんなが苦勞するものだ」という一般の認識が、咄の整合性よりも優位に立っている。「算用が合う、合わない」というエピソードの連なりに即して「合わぬ算用」にフォーカスすれば、自ずからタイトルは「大晦日」になるわけである。読者の陥る錯覚は、西鶴の語りの手さきによるものと言えよう。



以上、「山芋の煮しめ」と「大晦日」とを取り上げて、緊密に構築されているように見えるこの咄の中にウソ咄の要素が含まれていること、及び読者は語り口に乗せられ、矛盾を感じる暇無く一気に結末に導かれることを指摘した。話のスピードによって、不合理性は置き去りにされているのである。こうした特徴は、軽口咄らしさの一端を担う要素と考えられる。

## V おわりに

『西鶴諸国はなし』巻一「大晦日は合はぬ算用」を、西鶴の創作方法に注目して読み直してきた。新たに盗賊説話を本話の素材として提示し、「盗賊説話」を「金を巡る歳末の浪人群像の咄」の中に取り込む着想にこそ、西鶴の作意があるとした。その中で、

- ・ 主題や主人公は十全には機能していないこと
- ・ 咄全体を貫く論理が「算用が合う、合わない」にあり、そこに当てはまる様々なエピソードを繋ぎ合せていること
- ・ 咄の主眼は、盗賊説話から発して、歳末の掛取り・不明な余剰金など複合的にとらえた「合はぬ算用」を、「仲間うちの義理」が生きる浪人集団と結びつけた西鶴の奇想にあること

を明らかにし、一見したところ首尾一貫しているように見える本話の中にも、たくまれたウソ咄の要素があり、一つの方向性で読まれることを拒否している側面があることも触れた。虚実入れまぜにした西鶴の語りの妙と軽口の気分とを、いくらかでも抽出できたのではないかと思う。

第二節において、内助の人物造型は類型的であると述べた。しかし、

(十二)

思いがけない方法で金が入ったことへの内助の反応や、特殊集団である浪人仲間の会話と動きなどが時間を追って描かれることによって、本話は結果的に行間に世の人心（人の不思議さ）を読み込める作品になっている。西鶴が意図的に世の人心を描こうとして人物造型を目論んだかどうかは即断できない。しかし、論者はウソ咄の中にあるこうした作品の豊かさを否定するものではないことを、最後に付けておきたい。

## 注

- 1 代表的なものに、近藤忠義とそれを継承発展させた暉峻康隆の論がある。近藤は、現代人にとつての価値の追究・発見に文学作品の意味があるという立場で、『日本古典読本 西鶴』11頁 昭和十四年 日本評論社に評言の解釈を掲出。暉峻は、劇的構成の緊密さと武士の義理や意地、人間としての誇りを読み取る（『西鶴評論と研究』上 206頁 昭和十三年中央公論社）。
- 2 吉江久彌「好色一代男」に始まるもの、「三」「西鶴文学研究」昭和四九年三月 笠間書院・吉江久彌「堪忍記」と西鶴」『西鶴とその周辺』平成二年 勉誠社・吉江久彌「西鶴 思想と作品」平成一六年七月 武蔵野書院
- 3 宗政五十緒『西鶴諸国はなし』一、二の考察―『季刊文学・語学』54 昭和四年一二月（『西鶴の研究』昭和四年四月未来社 所収）
- 4 田中伸「西鶴の説話の諸相」『解釈と鑑賞』昭和四二年二月
- 5 森山重雄「西鶴―人間喜劇」『日本古典鑑賞講座 西鶴』、昭和三年七月 筑摩書房（『封建庶民文学の研究』昭和三五年一〇月三一書房 所収）
- 6 前掲注5論文
- 7 湯沢賢之助「『大晦日はあはぬ算用』をめぐる―西鶴武家観の



- 一端―『日本文学』昭五八年七月
- 8 堀切実『西鶴諸国咄』における〈笑い〉の分析『学術研究 國語国文学編』33 昭和五九年一月(『読みかえられる西鶴』二〇〇一年三月 ぺりかん社 所収)
- 9 谷協理史『西鶴 研究と批評』127頁 平成七年五月 若草書房
- 10 例えば湯沢賢之助氏は、前掲注7論文において、小見出し「義理」について、「(義理をめぐる人間模様という程度の) 一つの話柄であり、読みの方向を決定づける価値観を提示したものではない」という立場を表明している。
- 11 杉本好伸「『大晦日はあはぬ算用』について考える」『西鶴と浮世草子研究』3 平成二二年五月 笠間書院
- 12 本文と評言との齟齬をめぐる問題、末尾に曖昧さを含む表現形態を選択している理由、評言と目録小見出しの枠組みとしての機能などの諸問題についても扱うべきであるが、紙幅の関係もあり別の機会に譲ることとする。
- 13 引用は、『日本古典文学全集 井原西鶴集』二 小学館による。
- 14 町奴や旗本の風俗についての詳細は次の二論考に譲り、ここでは繰り返さない。
- ・北島正元「かぶき者―その行動と論理」『近世史の群像』吉川弘文館 昭和五二年二月
- ・栢原昌三『旗本と町奴』大正一一年三月 国史講習会
- 15 この他、西鶴作品では、手内職などによって細々と生計を立てながら町人に同化して暮らす浪人や、ほとんど餓死寸前の貧しい暮らしをする浪人も描かれる(『本朝二十不孝』巻五「古き都を立出て雨」など)。
- 16 引用は、『日本古典文学全集 井原西鶴集』一 小学館による
- 17 重友毅『「西鶴諸国咄」二題』『重友毅著作集1』昭和四九年 文理書院
- 18 岡雅彦「西鶴名残の友と咄本」『近世文芸』二二 昭和四八年七月
- 19 『本朝桜陰比事』巻一「太鼓の中はしらぬが因果」。窮地に陥った仲間に対し、織物職人仲間十人が集まって「一升枰に十両ずつ一人一人投げ入れ」併せて百両の援助をする。金は「恵比寿棚に上げて酒宴」になるが、「小判は紛失」。「身晴れに」と騒ぐが未解決。奉行の慧眼によって証拠があたり、合力した仲間の一人が百両盗んだという真相が明らかになる。
- 20 前掲吉江久彌「好色一代男」に始まるもの二・三・吉江久彌「堪忍記」と西鶴
- 21 京都大学文学研究科図書館蔵の写本「恕子」作 正徳五年三月成立。
- 22 宮澤照恵「盗賊配分金銀之辯 全」解題と翻刻『北星学園大学文学部 北星論集』四九巻一号 平成二四年三月に翻刻紹介
- 23 『咄本体系』第二巻91頁 昭和五一年二月 東京堂出版
- 24 「身のぐひ」は不詳だが、自分の取り分の衣類であろう。
- 25 『日本古典文学全集 仮名草子集』小学館による。
- 26 盗賊の心情に目を向け、会話を通じて咄に取り込んでいく傾向は、既に『嘶物語』下の二「盗人のはなし」・「安養の尼物語」などに前例が見られる。
- 27 前掲注11論稿
- 28 宮澤照恵『西鶴諸国はなし』成立試論―書誌形態を通して―『國語国文研究』一一五 平成二二年三月
- 29 「好色一代男」巻一の一の挿絵参照。なお、この図に西鶴の意図を読む論考がある(堅田陽子『西鶴諸国はなし』「大晦日はあはぬ算用」挿画考)『東海近世』平成二四年七月)

## (付記)

本稿は、二〇一一年八月の西鶴研究会における口頭発表をもとにしたものである。

[Abstract]

A Study of *Ootugomori wa awanu sanyou*  
A Side View of the Conception and the Method

Terue MIYAZAWA

This thesis explains how interpret *Ootugomori wa awanu sanyou* (*Saikakusyokokuhanashi* No.1) by focusing on Saikaku's creative method. In this thesis, there is a new suggestion that *Touninsetuwa* is the subject material for this story.

Then it is stated that the intent of his conception is to include this subject material in *Ka newomeguru saimatuno rouningunzouno hanashi*, that is, there are three obvious facts found out.

First, the subject and the hero in this thesis do not function enough.

Second, this story has a consecutive logic which consists in whether “*Sanyou* (calculation) is correct or incorrect” and connects the various episodes which refer to this logic.

Third, the thrust of this story is Saikaku's novel idea that connects *Awanusanyou* to a group of unemployed people that have a debt to their company.